

真実を知るということ

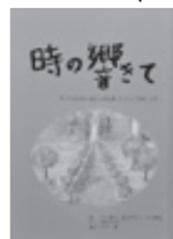
町立図書館司書 渡辺 奈美



今回の人権教育研修会「ハンセン病問題を通して、人権を考える」というテーマのプログラムの中で、一冊の絵本を読ませていただきました。

あることがきっかけで、作者、福安かずこさんは、子どもから大人まで大勢の方々にハンセン病のことを伝えたいという思いから、絵本「時の響きて」を平成十四年三月に自費出版され、その後平成二十二年に天台宗人権啓発事業のひとつとして再版されました。このおかげで、私も「時の響きて」という絵本と出会うことができました。私はハンセン病に関してわずかな知識しかなく、今回の朗読

の前に上映されたスライドで、読書をするために「舌読」―後遺症で視覚障害、手足の感覚麻痺のため、残された感覚器官の舌を使い点字の本を読む姿を見て、大変衝撃を受けました。



絵本にて、
十三歳の少年です。夏休みが終わり学校に登校すると、校長先生に「すぐ家に帰るように。」と言われ、家に帰ると父に、ただ「三ヶ月でいいから鹿屋に行つてこい。」と言われ、まさか国立ハンセン病療養所に連れていかれ、名前も変えられ、一生を過ごすことになると思ってもよらなかったことでしょう。
この少年のように、日本では

約九十年の間、感染力は極めて低く、昭和二十二年以降は治療薬が使用されるようになってからも、余儀なく療養所で隔離生活を強いられた方々ほどのくらいいらしたのでしょうか。現在も帰る場所がない二千人近くの方々が、療養所で生活をなさっています。絵本「時の響きて」は、この事実、多くの方々の悲しみ、苦しみを、一少年の物語を通してわかりやすく、ずっしりと伝えてくれます。

朗読のあと、十九歳の時に初めてハンセン病患者さんたちと接し、四十歳を過ぎてからハンセン病療養所で医師を務めた、神谷美恵子さんについてもスライドで学びました。彼女自身、何回か大病を患い、『なぜ私たちでなくあなたが？あなたは代わってくださったのだ。』と思者さんたちの心の奥底に寄り添い続けた方でした。

尚、図書館には「神谷美恵子著作集」、子どもの本のコーナーには、神谷美恵子さんの伝記「群馬県のハンセン病患者のため」に尽くしたイギリスの女性宣教



師の絵本「リーかあさまのはなし」、その他ハンセン病に関する本も多数あります。また、天台宗様のご厚意で「時の響きて」を下諏訪の図書館、小中学校にご寄贈いただきました。今回の研修をきっかけにハンセン病に関してだけでなく、一方的な情報を鵜呑みにしないで、何が真実なのかを自ら見つけていきたいと思いました。



絵／吉井優子・福安かずこ・吉井理峯
文／福安かずこ 題字／吉井 葵

人権教育研修会に参加して

僕が何かしたの？ わるいことしたの？

下諏訪北小PTA会長 竹村 幸治

表題はハンセン病の子どもの気持ちを描いた『時の響きて』の朗読を聞いて印象に残った言葉です。気持ちも物事の感じ方も一般の子どもと何ら変わらぬのに、ただハンセン病であったため周囲から本当に酷い仕打ちを受け続けたイサオの言葉です。

特定の施設での監禁生活を強いられ、家族、故郷、未来も奪われました。中には生まれた赤ちゃんも殺された感染者もいたそうです。人を守る法律が人を苦しめました。

現在では何の問題もない病気で、感染もしないし遺伝もしないことが分かっていますが、なぜそのような悲劇が起ったのでしょうか？

最大の原因は正しい知識を持っていなかったからだと感じます。見た目だけで判断し、ただ

恐怖を感じてしまいそれを知ろうとする勇気がないからではないでしょうか。そんな中、神谷美恵子という一筋の光をもたらす人物がいました。恵まれた環境に生まれたエリートでしたが、この問題にショックを受け四十歳を過ぎてからハンセン病の偏見問題の改革に携わりました。偏見や差別をするのも人間。神谷さんみたいに救う手を差し伸べるのも人間。どちらも私たちがなのですね。だれもなりたくて病気になるわけではありませんが、逆に自分がそうならたかもしれない。ハンセン病の偏見差別に限らず、いじめ問題も紙一重で、立場がどちらに転がるかもわかりません。

私たちに求められることは、「相手の立場や気持ちを察する」勇気を持つことと、努力ができる人間になることでしょうか。そして子どもたちにもそんな教育が必要ですよ。

最後に、研修会に出て理解したつもりになり、自己満足に浸り、自分の善を誇る悪にならないようにしたいと思いました。

人権から ハンセン病を考えて

住民環境課 宮原 晴香

ハンセン病が今回のテーマと聞いてまず思い浮かんだのが、小泉元総理が隔離政策について謝罪しているニュースでした。当時学生だった私はその時初めてこの病気を知り、衝撃を受けたのを覚えています。ハンセン病が治った現在でも差別・偏見が解消していません。療養所で生活している方々がまだまだいるのがこの問題の根深さを語っています。

私自身は生まれてからこれまで特にハンセン病とは無縁の生活を送っていて、差別問題と聞いてもピンとくるものがありました。

しかし、今回たぐさんの参加者の方々のお話を聞く中で、実際「幼い頃隔離病棟の近くでは息をするなど大人たちに言われたことがある」という方もいて、誤った知識により差別が助長さ



れるという事は決して遠い昔の出来事ではなく、ごく身近で起こりうるのだと実感することができました。
現在は昔と比べインターネット・テレビなど情報が溢れる社会となり、自分自身何が正しいのか見極める必要がある時代となりました。ニュースを見ていても、新しい病気の脅威に日々さらされています。実際に自分自身が未知の問題に遭遇したとき、冷静にいられることは難しいと思います。
今回学習したハンセン病問題を一つの教訓に、何が真実か一度立ち止まって考えることを大切にし、相手の立場にたてる人になれたらと強く思いました。